

# 国語科教育の必要性と意義に関する研究

——伝統的な言語文化の事例をもとに——

岡 利 道

## 一、本研究の基盤

### (一) 国語科教育の必要性と意義

国語科教育は、決して欠くことのできない、重要な価値を有するものである。「教育基本法」の第五条には、「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を養い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。」をはじめとして、根幹となるところの教育の目的が示されている。それらを実現する目標ということで、「学校教育法」における「義務教育の目標」(第二十一条)へとつながっていく。その五番目に、「読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養うこと。」がある。この目標を達成するための教育内容を含む教科として、国語科が位置付けられていくのである。国語科教育は、ここに存立の基盤を持つ。

国語科教育の必要性と意義をより具体的に捉えるならば、桑原(二〇〇二)が述べるように、言語は個人的なものであると同時に社会的なものであり、言語によって人間形成が図られていく、との考えに集約される。整った国家政策により国語科教育という仕組みが連綿と続く中で(勿論他の教科等の教育とともに)、誰からも信頼される質の高い教育が今日ここにあるわけである。桑原は、ことばの機能として、次の四つを挙げている。「伝達(コミュニケーション)としての機能」「認識・思考としての機能」「感情の喚起と整序としての機能」「言語文化の創造と享受としての機能」である。

そもそも、教育の一般目標は、平成一八年一二月公布・施行の改正「教育基本法」第一条・教育の目的にもあるように、「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」ということであり、今後もゆるぎない地位を占める。具体的には、第二条・教育の目標で五項目が示され

るわけであるが、中でも「五 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」

ことは、注目に値するだろう。なぜなら、国語科教育においては、その「伝統と文化を尊重」が「伝統的な言語文化を尊重」という形で引き継がれているからである。「小学校学習指導要領・国語編」でも、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を明確に位置づけ、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることや、国語が果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けることとともに、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てていこうとしている。同学習指導要領では、取り分け「伝統的な言語文化」に関する指導の重視という方針を打ち出し、「伝統的な言語文化」は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきたことから、それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している。例えば、低学年では昔話や神話・伝承など、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用語や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げている。

このように、国語科教育の必要性と意義を押さえる中で、自然と「伝統的な言語文化」の教材・単元の重要さというものが浮かび上がってくる。こうなると、次には、「その実

践を如何にして充実させていくか」という問いが見えてくる。

## (二)「伝統的な言語文化」の授業実践における独自性

岡(二〇一五)では、「伝統的な言語文化」の授業実践における独自性を把持している実践とは、学習者の生活圏における言語文化を取り上げることににより、または、現代の視点から過去の言語文化を見つめる活動を行うことにより、学習者の使用言語における語彙体系を拡充・深化することを目標として展開されているものであると藤森(二〇一四)の見解が支持されることを述べた。同時に、気にかかるとして、例えば沖縄地方の『おもろさうし』に代表されるような、地域に根ざした歌謡、民話、伝説等の教材が使用された実践を見出しにくかった問題を指摘した。それは、新たな教材開発の必要性を示すことでもある。

先の「その実践を如何にして充実させていくか」という問いに対して、ここで、「以下に示す新たな教材開発による実践の提案が一つの答となるのではないか」との仮説を立てる。さて、当広島地方を例とするならば、地域に根ざした歌謡、民話、伝説等の素材として大きな魅力を秘めた存在の一つとして、『篁山竹林寺縁起』を挙げることができる。

ごく最近の『篁山竹林寺縁起』研究を見るに、森下(二〇一六)において、有益な示唆を得ることができると述べている。

弘法大師や行基ほどには宗教性を帯びていない小野篁を寺院の祖とするためには、篁に宗教的な神秘性や聖性を纏わせる必要があったはずである。いわば、弘法大師や行基と同格の神性を与え説明するための物語として、『竹林寺縁起』の篁一代記は紡ぎ出されたのだ。」との見解など、この縁起の教材としての価値（教材開発するにふさわしい素材であること）を端的に示すものであろう。

如上のことを踏まえ、以下の「二、伝統的な言語文化の単元についての一提案」において、具体的に述べていくことにする。

## 二、伝統的な言語文化の単元についての一提案

### （一）教材開発に向けて

#### ① 教材開発とは

国語教育研究所（一九八八）によれば、教材開発とは次のような性格を有するものである。すなわち、「これまでどの教科書にも採択されたことのない文章・作品・資料などを、新たに授業の材料（教材）として、発掘・選択・創造する作業のことである。教材の代表は、言うまでもなく教科書教材であるが、その教科書は、編集には英知を結集してあたるものの、全国的な、一般的な学習者を想定して作成されるために、必ずしもどの地域の学習者にも最適の

教材を提供できるとは限らない。そこで、必要に応じて、その教室、あるいは学習者にふさわしい教材を、教師自らが、教科書以外の資料から発掘・選択・創造（開発）し、それを教材として、授業に導入することがありうる。それは、児童文学であったり、地域文集からの作品であったりする。場合によっては、さらに身近なもので、教師が自作したものや、級友の作品が取り上げられることもある。

こうした、教科書以外の教材を新たに発掘・選択・創造することを、教科書教材と区別して、「発掘教材」、「自主教材」、あるいは「投げ入れ教材」と言うこともある。なお、これらの教材の開発にあたっては、教材的価値、学習者の興味・関心の傾向、学習者の学力の実態、教師の指導力などに照らして、よく吟味されたものでなければならない。」というものである。

まさに引用中にあつた「これまで、どの教科書にも採択されたことのない文章・作品・資料など」がしかるべき素材にあたり、ここでは地元・地域ならではの『篁山竹林寺縁起』を取り上げるわけである。「一」で触れたことからしても、まさに、地域の学習者に最適教材を開発することが求められていると見ることができ、学校として教師として、カリキュラム・マネジメントによって適切に授業に取り入れていくとよいと考える。<sup>11)</sup>

## ② 現行の国語教科書に見える小野篁と『宇治拾遺物語』

学校図書の五年生教科用図書(上)に、『宇治拾遺物語』を紹介した単元がある。単元名は、「言葉の文化に親しもう 宇治拾遺物語」である。冒頭に、「小野篁広才(こうさい)の事」が紹介され、児童を古文の世界に引き込む導入の役割を果たしている。次に、「古文の世界にふれる」という文章が続き、古典には古文と漢文とがあり、そのうちの古文では、『万葉集』や『源氏物語』などの有名な作品があるとのガイドがなされていく。そして、おなじみの「こぶとり」や「舌切りすずめ」の話は、先ほどの小野篁の話とともに、『宇治拾遺物語』に入っている、と続いていく。加えて、「舌切りすずめ」の話は、『宇治拾遺物語』では「雀報恩の事」という題名の話で載っていることが紹介される。実際にその原文(二部)と現代語訳が並列的に示され、児童が把握しやすいようになっている。末尾の「課題」として、「やってみよう」「雀報恩の事」を現代語訳で読んで、「舌切りすずめ」とどんなところがにているか、どんなところがちがうかを話し合ひましょう。」という活動に取り組ませる流れ(前掲教科書一〇二―一〇七ページ)となっている。

このように、国語(小学校)の教科書を発行している会社五社のうちの二社ではあるが、学校図書が小野篁を取り上げていることからしても、『篁山竹林寺縁起』の教材開発

は、ある程度の妥当性を持つと言えるだろう。

### ③ 関連資料の利用

さらに取り上げたい資料は、竹林寺がある広島県東広島市が発行している「駅からまち歩き! 東広島てくてくマップ No.7 入野駅 入野 篁伝説と竹林寺参詣」という観光用パンフレットの一種である。表裏両面印刷一枚物パンフレットで、ここでは、JR入野駅から竹林寺経由でJR河内駅ゴールの総距離七・四キロメートル、所要時間約三時間三〇分の散策コースが紹介されている。行程中の名所旧跡等の紹介を含めた散策のガイド、竹林寺と小野篁の紹介記事、竹林寺伝説のミニ紹介などもあり、小学校高学年生ならば、独力で読むことができそうな内容である。本来の目的どおりの使用でもいいし、教室で教材の一つとして読むのもいいと思われる。実際に散策できない児童や教師でも、インターネット版も入手できるので、十分に読むことができる。<sup>(2)</sup>

### (二) 教材開発の実際

以上のことを基礎として、実際の可能性を探ることとする。なお、以下に示す資料群は、広島文教女子大学主催「平成二七年度 教員免許状更新講習 選択コース 小学校」における国語科の講座で配付したものの一部である。

先進的な実践としては、水戸部修治・真美ヶ丘第一小学

校学習研究会（二〇一五）に注目した。ここでは、①地域素材「たけとり」を生かした多様な教材・単元を開発したこと、②主体的な思考・判断等を発動する単元を貫く言語活動を開発したこと、③全校を挙げて「たけとり」の教材化に取り組んだことにより系統性を明確化したこと、④特別支援学級における「伝統的な言語文化」に親しむための言語活動を開発したこと、という面で参考になる事例が収められている。まさに、『篁山竹林寺縁起』を核として、真美ヶ丘第一小学校のような体系的なカリキュラムが構築できれば最善であろう。同書における事例を参考にし、地域の特質を生かした教材開発の、まずは第一歩を踏み出すつもりで、以下の提案をしていった。

### ① 呼びかけ

次のような「演習のてびき」により、受講生に呼びかけをしていった。

#### 演習のてびき

教材開発 『篁山竹林寺縁起』を子供たち  
ちに！

では、講義者とともに（間接的な体験として）、教材開発のプロセスを辿ってみて下さい。一つの例です。対象学年は、第五学年とします。

### ステップ一

原典（現物）を探そう

ともかく、『篁山竹林寺縁起』そのものを見つけてみましょう。例えば、公共図書館のリファレンスサービス・文献複写サービスを利用して取り寄せることができます。

ここでは、別紙の形で見てもらいます。如何でしょうか。やや難解そうですね。しかし、いにしえの香りが感じられると思います。

### ステップ二

各社の教科書で類似した例がないか確かめよう

この場合、偶然ながら、小野篁と『宇治拾遺物語』等を扱った教材が、学校図書の第五学年の国語教科書で見つかりました。それには、興味深い事柄がたくさん盛り込まれていますので、必要に応じて、子供たちに紹介してあげるといいと思います。

今めざしていることとずれるので、それについては、これ以上は触れないこととします。

### ステップ三

時には楽しく！ ウェブサイトも調べてみよう

公的なウェブサイト（東広島市や広島大学図書館など）、私的なウェブサイト（研究者やマニアなど）、いろいろ見つ

かります。小野篁とか、竹林寺とかのキーワードで検索してみると、様々な面白いページが見つかります。ここでは、「てくてくマップ」と、「特殊コレクション（画像）」を紹介します。知識も増えますし、指導に向けてのヒントなども見つかるでしょう。

#### ステップ四

情報収集を兼ねて現地視察をしよう

これができたに越したことがないのは、みなさんも了解されるでしょう。先の「てくてくマップ」もあることですし、「百聞は一見にしかず」です。残念ながら、講義者は、まだできていませんが…。

#### ステップ五

楽しいことのアとは…できれば研究論文も読んでみよう

研究論文なんて手が届きにくいと思っただけじゃないですか。実は、現在は、驚くほど様々な論文が公開されるようになっていきます。各大学がリポジトリというシステムを使って、積極的に研究成果を公表しているからです。

ここでは、私の同僚でもある森下要治氏の論文を紹介します。

#### ステップ六

使えそうな情報を入力してファイル（あるいはデータベース）を作ろう

その一例が次のページ以下の内容です。コピー&ペーストしたり、時には自力入力したり、現代語訳を試みたりし、ファイルを作り上げます。のちほどご説明します。そして、それらを使って、いよいよ最終段階です。（ステップ七は数ページあとに示しています。）

#### 補足

ステップ五で紹介した論稿は、次の二本である。

① 森下要治（一九九九）・森下要治（二〇〇一）

② その他に示した資料（配付レジユメ）

次ページより、レジユメの実際を紹介する。

和田茂樹他（編）『瀬戸内 寺社縁起集』より「篁山竹林寺縁起―複製と翻刻―」の一部（省略）

学校図書（編）（二〇一五）、小学校五年生国語教科用図書

（上）の一部（省略）

東広島市産業部商業観光課、「駅からまち歩き！ 東広島てくてくマップ No.7 入野駅 入野 篁伝説と竹林寺参詣」（ホームページのデータ取得は二〇一六・六・一三）（省略）

【ファイル例】『靈山竹林寺縁起』について

一「靈山竹林寺縁起」(たかむらやまちくりんじえんき)解説  
縁起とは、ある特定の寺社(聖地)について、その起源や由来を物語るテキストのことである。仏教語の「因縁生起(いんねんしょうじき)」を略したものである。  
靈山竹林寺は、真言宗御室派別格本山であり、広島県東広島市(もと)は賀茂郡河内町入野(にゅうの)にある。

同寺で所載されている「靈山竹林寺縁起(絵巻)」が、ここで言う縁起の主役である。室町時代末期頃までに成立したとのこと。和化漢文による本文は上巻十四、下巻十三の絵で分けていた。内容は、靈山竹林寺の由来を語るものなら、その多くが小野篁のおのたかむら等の説話を集成して一代記風にまとめた物語で占められている。篁は、平安時代の歌人にして、地獄を自由に往還したという逸話を持つ伝説的人物である。次のとおり。(本学の森下治教授によるものを参照した。)[ ]中の表現は原和化漢文をそのまま読み下したものである。①-⑧は、岡が説明の必要を上げた。

- ①入野の地に「夜な夜な光を放ち、日々に紫雲降る」不思議な山があった。諸国行脚の僧・行基がこの山に登ると、頂上板の巨木があり、仏の姿をしている。行基は自ら手親音を影り、寺を開いて桜山花王寺と号した。
- ②この山の麓に「生不犯」の女があった。竹野辺秀麿の女、八千代という。延暦十九(八〇〇)年中夏から、千手観音を千日詣でし、その満願の夜、彼女の前に一人の童子が現れ、五色の玉を彼女の懐に入れた。五月半ば、竹田村の竹林を通りかかった八千代は、俄かに戯れ心を起こし、生えていた筍に「嫁を為す。八千代は懐妊し、十か月後に「玉体の子」を出産した。産湯をつかった池は「今に」残っている。子は自ら「篁」と名乗り、「二三歳」で異常な学問の才能を示した。
- ③主・竹野辺は篁を愛したが、竹野辺の妻はそれが面白くない。篁に毒を盛ったが失敗する。篁はこれを恨み十二歳で時疫郷を出て、東に向かった。都に上った篁は「能芸才覚」「手跡詩歌」の誉れは天下に聞こえた。
- ④篁十八歳の頃、西三条岡白・小野良相の姫に「甲乙」をもって求婚し、岡白の目に留まって嫁取られ、「小野」と名乗った。さらには嵯峨天皇に仕え、「参議大夫」となった。ある時は「無悪善」「一伏三仰」の謎を解いた。またその才学によって、文章博士となり、遣唐使として渡唐。白來寺と対面して詩才を示すと、名前は天下に聞こえ、家も栄えた。(以上、上巻)
- ⑤岡白良相が頼死した。良相の服罪では、恐ろしい光が延々と繰り返られていた。次には良相が地獄に墮るといふとき「第二冥官宗帝王」のはかりごとによって、良相は婆娑へ返されると言われた。この「宗帝王」とこそ小野篁であった。衆生活度のために、仮に「再誦」したものと云う。良相は婆娑では決して口外しないことを誓い、蘇生業の導師「寂光大師」の知識と弁舌の素晴らしいこと、篁は「名徳作開」の七言詩を詠んだ。一方、良相は「釋」の余り、姫君に地獄の有様を語り、篁が冥官であることを明かしてもらう。やがて姫かその旨を承められた篁は「一拜」(八十五)年初秋、五十歳の時、愛宕寺前の大地を蹴破って、地獄に還つて行く。よって彼の所を「六道三つ」と言う。
- ⑦は「一〇〇年を経た天曆五(九五)年、篁は「化僧」として、花王に再び姿を現し、僧は地蔵尊一体、土王の尊像の九体、山神一体を造立し、観音像の傍らに安置して、姿を消した。以来「靈山竹林寺」と号した。
- ⑧さて僧が姿を消して皆が「奇特の思ひを成」していたところ、その夜うちに十王尊の残り一体が出現した。この最後の一体は篁が変化したもので、この十王像のなかには生身の一体があるのである。(以上、下巻)

(なお、「瀬戸内寺社縁起集」原文は、別に掲げている。)

二「靈山竹林寺縁起」中で特に引用できそうな箇所

先の要約も、平易な表現に改めるならば、教材作ることができるはずである。  
さらに、ここでは、より原文の香りを伝える教材化に向けて、それが可能な箇所をピックアップしてみることにする。

(一) 行基のえにしの部分 ↓ 前ページの要約部分では①に当たる

葦原<sup>アサハラ</sup>豊田<sup>トヨタ</sup>郡<sup>ノ</sup>入野<sup>イリノ</sup>郷<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>山<sup>ニ</sup>、自<sup>ラ</sup>其<sup>ノ</sup>絶<sup>ト</sup>巖<sup>ニ</sup>放<sup>テ</sup>光<sup>ヲ</sup>、日<sup>々</sup>紫雲<sup>降</sup>矣<sup>ニ</sup>、諸<sup>人</sup>雖<sup>モ</sup>令<sup>レ</sup>怪<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>、無<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>由<sup>リ</sup>、爰<sup>ニ</sup>仁皇<sup>四十五代</sup>聖<sup>武</sup>天皇<sup>御宇</sup>天平<sup>正</sup>暦<sup>二</sup>年<sup>(庚午)</sup>中夏<sup>ノ</sup>之<sup>日</sup>比<sup>シ</sup>行基<sup>ヲ</sup>、登<sup>リ</sup>彼<sup>ノ</sup>山<sup>ニ</sup>、而<sup>シテ</sup>四<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>為<sup>シ</sup>ヲ<sup>シ</sup>、以<sup>テ</sup>殊<sup>ニ</sup>竊<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>、西北<sup>ノ</sup>大慈<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>嶺<sup>ニ</sup>高<sup>ク</sup>廻<sup>リ</sup>、而<sup>シテ</sup>留<sup>リ</sup>、二十五種<sup>ノ</sup>善水<sup>ヲ</sup>、白雲<sup>遠</sup>雖<sup>隔</sup>、四十<sup>ノ</sup>由<sup>旬</sup>、蒼<sup>々</sup>奇<sup>々</sup>矣<sup>ニ</sup>、三<sup>ノ</sup>辰<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>影<sup>ヲ</sup>浮<sup>リ</sup>、玉<sup>池</sup>一<sup>ニ</sup>、南<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>悲<sup>深</sup>深<sup>ニ</sup>落<sup>リ</sup>、而<sup>シテ</sup>流<sup>リ</sup>、十五種<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>惡<sup>水</sup>、青<sup>山</sup>遙<sup>雖</sup>隔<sup>、</sup>七十<sup>ノ</sup>余<sup>ノ</sup>里<sup>、</sup>遠<sup>海</sup>漫<sup>漫</sup>矣<sup>、</sup>普<sup>陀</sup>一<sup>ニ</sup>、独<sup>リ</sup>一<sup>ニ</sup>法<sup>界</sup>故<sup>無</sup>續<sup>リ</sup>於<sup>余</sup>山<sup>、</sup>森<sup>羅</sup>万<sup>象</sup>故<sup>交</sup>万<sup>木</sup>枝<sup>、</sup>誠<sup>是</sup>希<sup>代</sup>不<sup>思</sup>佛<sup>之</sup>勝<sup>地</sup>也<sup>、</sup>加<sup>シテ</sup>爰<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>大<sup>ノ</sup>櫻<sup>ノ</sup>樹<sup>、</sup>及<sup>シ</sup>三<sup>ノ</sup>枝<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>、而<sup>シテ</sup>自<sup>ラ</sup>備<sup>フ</sup>佛<sup>佛</sup>形<sup>、</sup>風<sup>鳴</sup>、梢<sup>有</sup>、有<sup>意</sup>眼<sup>視</sup>衆<sup>生</sup>福<sup>聚</sup>海<sup>無</sup>量<sup>之</sup>響<sup>、</sup>茲<sup>則</sup>先<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>放<sup>テ</sup>光<sup>一</sup>於<sup>一</sup>物<sup>、</sup>誠<sup>一</sup>法<sup>性</sup>隨<sup>緣</sup>、姿<sup>真</sup>如<sup>實</sup>相<sup>理</sup>、新<sup>覺</sup>侍<sup>、</sup>(絵)則<sup>チ</sup>行<sup>基</sup>善<sup>薩</sup>、取<sup>テ</sup>彼<sup>ノ</sup>櫻<sup>木</sup>一<sup>、</sup>為<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>影<sup>ヲ</sup>刻<sup>テ</sup>千<sup>手</sup>尊<sup>容</sup>、而<sup>シテ</sup>造<sup>立</sup>一<sup>ノ</sup>字<sup>精</sup>舍<sup>、</sup>名<sup>ヲ</sup>櫻<sup>山</sup>花<sup>王</sup>寺<sup>、</sup>述<sup>シ</sup>供<sup>養</sup>、濟<sup>會</sup>、訓<sup>み</sup>下<sup>し</sup>。

ここに、葦原豊田の郡入野郷に一の山あり、その絶巖より夜々光を放つ。日々に紫雲降る。諸人これを怪しむと云ふとも、其の由を知らぬ。ここに皇四十五代聖武天皇の御宇天平正暦二年(庚午)中夏のころ、行基彼の山峯よじ登り、四方の体たらくを竊におもんみれば、西北は大慈の嶺高く廻りて、十五種の善水を留めおく。白雲遠く四十由旬を隔つといえども、蒼々奇々として、三辰の影玉池に浮かび、南は大悲深く落ちて、十五種の惡水を流し、青山遙に七十余里を隔つといえども、遠海漫漫として、普陀善を現前に見る。独り一法界の故に余山に續くなし、森羅万象の故に万木枝を交え、誠にはれ希代不思議の勝地なり。加えてここに大なる櫻の樹あり、枝一干に及んで、自ら佛形を備ふ。風梢を鳴せば、慈眼視衆生福聚海無量の響あり。これ則ち先に光を放つ所のものなり。誠に法性に随ひ縁の姿、真如實相の理、新たに覺え侍る。(絵)則ち行基善薩は、彼の櫻木を取りて、御衣木と為し、自から千手の尊容を彫刻し、一字精舍を造立す。名づけて櫻山花王寺と号し、供養の濟會を述ぶ。

(二) 篁の出生の部分 ↓ 前ページの要約部分では②に当たる(部分)

彼山麓竹野邊之秀職云人之下女(字八千代)有二一一生不犯者、恒當寺御本尊奉信敬  
矣、延曆十九年(庚辰)自中夏之比、彼寺二千日之間丑刻參詣無怠、去程千日已滿  
夜半斗、御寶前眠居覺風吹、來而戸帳打上覺、自内扇切々鳴而拔覺、不思飯  
念奉見之、敝童子一人立出給之矣、五色玉持來侍、自懐中押入給覺、  
無夢幻、新覺而彌信力強盛、而下同道趣覺、

比者五月半事、竹田村云處在竹林、其邊立寄徘徊、笏子不知幾數、多生出  
覺、有二八代俄戲之心、此竹子為嫁立歸時、惜別離名殘、一首哥詠云、  
美之質與能奈古利曾於新幾志乃免野左哥那詠古登遠飛登仁賀多留南云云、  
詠み下し

彼の山の麓に竹野邊の秀職と云ふ人の下女(字は八千代)に一生不犯の者あり。恒に當寺の御本尊  
を奉りて信敬し、延曆十九年(庚辰)中夏の比より、彼の寺に一千日の間丑の刻參詣怠り無し。去る  
程千日已に滿るの夜半ばかりに御寶前に眠り居ければ、風吹き來りて戸帳を打ち上ると覺へ、内よ  
り扉きりと鳴りて抜けけり。不思飯に念ひてこれを見奉りて、敝しき童子一人立ち出で給ひて、  
五色の玉を持來し侍りて、自らが懐中に押し入れ給ひけり。夢幻とも無く新たに覺へて、いよく信力強  
盛にして、下同の道に趣きけり。

ころは五月半ばの事なり。竹田村と云ふ處に竹の林在り。其の邊りに立ち寄りて徘徊に、笏子幾  
くの数を知らず多く生へ出でけり。八千代、俄かに戯れ心あるや、この竹の子に嫁きを為す。立ち  
歸る時、別離の名残を惜しみて、一首の哥を詠じて云わく、  
みじかよのなごりぞをしきしのめのさがなきことをひとにかたるなと云ひ捨て、歸り侍り

(三) 遣唐使となつた篁の部分 ↓ 前ページの要約部分では⑤に当たる(部分)

如此不<sup>レ</sup>讀<sup>レ</sup>万<sup>レ</sup>讀<sup>レ</sup>、不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>賢<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>、任<sup>レ</sup>文章<sup>レ</sup>博士<sup>レ</sup>、度<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>使<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>、或<sup>レ</sup>時對<sup>レ</sup>  
白<sup>レ</sup>樂<sup>レ</sup>、白<sup>レ</sup>語<sup>レ</sup>云、篁雖<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>才<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>、不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>李<sup>レ</sup>崎<sup>レ</sup>智<sup>レ</sup>惠<sup>レ</sup>、于<sup>レ</sup>時即<sup>レ</sup>篁<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>惡<sup>レ</sup>敷<sup>レ</sup>、李<sup>レ</sup>崎<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>詩<sup>レ</sup>  
被<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>申<sup>レ</sup>、其<sup>レ</sup>時此<sup>レ</sup>詩<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>ス  
詠み下し

かくのごとく読むこともなく万読み、知ることもなく方知る賢才なれば、文章の博士に任じ、度々  
唐使に渡る。或る時白樂に對す。白語りて云ふ、篁は才人なりといえども李崎が智慧には及ばぬ。時  
に即ち篁色色悪しく、李崎が一期第一の詩を出されよと見申し、其の時此の詩を出す。

ステップ④

ラスト①「葦山竹林寺縁起」を紹介する教材を作成しよう

例えば、その縁起のダイジェスト版カルタを作るか、「てくてくガイド」子ども版としてわかりや  
すい縁起の人物・出来事コーナーを盛り込んだパンフレットを作るとか、詠み下し文形式で主要な箇所  
を集めて「私の古典手帳」(六年間かけて綴じていくファイル)に綴じ込んでいける資料を作るとか  
様々にできそうです。

ここでは、冒頭部分(一)行基のえにしの部分・先の要約部分では①を、紙芝居仕立てにする方  
法を取ることとします。同部分の詠み下し文をもとに、現代語に直しつつ、ストーリー化します。また  
紙芝居の絵は、ラフスケッチ風にまとめるだけにとどめます。  
では、以下をご覧ください。

①「葦山竹林寺縁起」紙芝居 その巻 「行基様と桜の木」

- ① 大野の地に、たいそう不思議な山があった。毎晩、山の上でつべんの方で、何やら光を放っているところがある。昼間でも、人々が山を見上げると、紫色をした雲が何時もかかっている。
- ② さて、行基といふ名の立派なお坊さんが、全国を旅して回っていた。この大野にやってみると、その山を見た時、はつと息をのんだ。
- ③ 「何かあるに違いない」と、行基様は早速頂上まで登り始めた。
- ④ やつとこの山頂に着くや、光を発する大きな桜の木がばあつと目に入ってきた。何とこの木は、仏様の姿に見えたそうなの。
- ⑤ 行基様は、その木をいたなで、せつせと彫り進め、千手観音というありがたい仏像を完成させた。また、仏様をおまつりするお寺もお造りになった。その寺は、桜山花王寺と名づけられた。

ラフスケッチは、次のように考えました。

行基様 と 桜の 木	
	
	
	
	



### ステップ④

イラスト1「篁山竹林寺縁起」を紹介する教材を作成しよう

パートTwo

実際に、「1」からは、先のパートOneの要領に従って、受講者の皆様に作業していただきたいと考えます。

場面は、二ページ前の「1」(二) 篁の出生の部分・先約部分では②の「1」の箇所とします。

「篁 山竹林寺縁起」紙芝居かしばいその式「篁 誕生の秘密」

※左のスペース内に、ストーリーを書いてください。

ラフスケッチは、次の枠を利用して、ざっと書き入れてみて下さい。枠が足りないようでしたら、付け足してください。

表紙

篁 誕生の 秘密	①	②	③	④	⑤
----------------	---	---	---	---	---

### 三、次のステップに向けて

今後の課題は、本研究を、真美ヶ丘第一小学校が実践したように、各学年にわたる指導計画を構想するとともに、各学年における単元と言語活動をより精密に設計していく研究へと発展させることである。

しかしながら、まずはスモール・ステップとして、基礎的な作業を積み重ねることが、結局のところでは近道になると考える。先に掲げた教材開発の一提案としての紙芝居づくりの内容をさらに充実させる意味でも、他の活動を開発していく意味でも、『篁山竹林寺縁起』の原文・訓み下し文・現代語訳等の基礎資料の整備に努めることが重要である。子供向けのやさしい読み物が作られるならば、それに越したことはない。教育現場の教師・子供たちから、必ずや歓迎されるに違いない。<sup>3)</sup>

注

(1)水戸部修治・真美ヶ丘第一小学校学習研究会(二〇一五)でも、「これまで検討してきたような「伝統的な言語文化」を学ぶことの価値を更に高める上では、特に地域に根ざした言語文化の教材化や授業開発を重視したい。目の前の子供たちに必要な国語の能力を育むためには、その地域や学校等の実態を踏まえて付けたい力を絞り込む必要があるからである。またそれを可能にするのが「伝統的な言語文化」の指導の特徴でも

ある。」と述べており、ここからも緊要な課題であることがわかる。

(2) 本稿では詳しく述べられなかったが、パンフレット(リーフレット形式のガイド・紹介資料)づくりへと展開する單元化も魅力は大きい。水戸部も、「リーフレットを始めとしたパンフレットや小冊子などは、新聞などと同様に、複数の文種を編集して一つのメディアとして発信するという性質をもつ」(前掲書四六ページ)との価値を指摘している。

(3) 『篁山竹林寺縁起』以外で、この面での広島県ならではの素材を挙げるならば、「稲生物怪録」(三次市)、「頼山陽詩選」(広島市)、「菅茶山 黄葉夕陽村舎詩 冬夜読書」等が挙げられよう。

#### 引用文献

浜本純逸他(編)(二〇一五)、みんなと学ぶ 小学校 国語 五年上、学校図書

藤森裕治(二〇一四)、「伝統的な言語文化」の独自性、月刊国語教育研究 No.五〇八、四〜九ページ

国語教育研究所(編)(一九八八)、国語教育研究大辞典、明治図書出版

桑原 隆(二〇〇二)、「ことば・文学を学ぶことの意義」、全国大学国語教育学会編、新訂小学校国語科教育研究、五〜八ページ

水戸部修治・真美ヶ丘第一小学校学習研究会(二〇一五)、「單元を貫く言語活動」を位置付けた小学校国語科「伝統的な言

語文化」の授業パーフェクトガイド、明治図書出版

森下要治(一九九九)、行基と竹と文殊のえにし、『篁山竹林寺縁起』を読む、文教国文学 No.四〇、三六〜四六ページ

森下要治(二〇〇一)、『篁山竹林寺縁起』の世界、陰陽路の歴史と風景(広島文教女子大学地域文化研究叢刊2)、二六〜六六ページ

森下要治(二〇一六)、『篁山竹林寺縁起』における篁説話の位相・続考―小野篁の造型をめぐる、文教国文学 No.六〇、二五〜三四ページ

岡 利道(二〇一五)、「伝統的な言語文化」の授業実践における独自性とは―小学校・中学校・高等学校の国語科の中で―、文教国文学 No.五九、(一)〜(九) ページ

和田茂樹・友久武文・竹本宏夫(編)(一九六七)、瀬戸内 寺社縁起集(中世文芸叢書9)、広島中世文芸研究会

(本学教授)